

沖縄県内の重要生息地・泡瀬干潟 野鳥誌掲載記事

＜泡瀬干潟を窮地から守ろう！ バードライフが沖縄北方対策大臣に要請文を提出＞
(No.665 2003年6月号 p.34)

＜泡瀬干潟が危ない！ 泡瀬干潟シンポジウム－埋立ての問題点と保全に向けて＞
(No.662 2003年3月号 p.29)

＜泡瀬干潟が危ない！ 6団体合同で質疑応答・要望を行いました＞
(No.660 2003年1月号 p.32)

＜守ろう！ 沖縄最大の自然干潟 シギ・チドリの貴重な生息地・泡瀬干潟埋め立て問題！＞
(No.658 2002年11月号 p.36)

＜緊急アピール！ 出島方式では“自然干潟”を残せない
沖縄最大の干潟・泡瀬干潟埋め立て問題＞
(No.657 2002年9/10月号 p.45)

＜ヘリコプター着陸帯移設事業 アセスへ意見書を提出 沖縄・やんばる自然保護問題＞
(No.657 2002年9/10月号 p.46)

＜ヤンバル保護で要望書＞
(No.622 1999年7月号 p.38)

泡瀬干潟を窮地から守ろう！

バードライフが沖縄北方対策担当大臣に要請文を提出

(No.665 2003年6月号 p.34)

本会からの要請に基づき、バードライフ・インターナショナル（以下 BLI と略）は、3月17日付で沖縄北方対策担当大臣宛に泡瀬干潟保全の要望書を送付し、政府に国際的に重要な干潟の保全を要請しました。その主旨は次の3点です。

- (1) 国際的に重要であり、IBA（注）に予定されている湿地にダメージを与える埋立事業を凍結し、見直しを行うこと。
- (2) 泡瀬干潟の生態系を破壊することなく現状のまま保全する方法を確立し、持続可能な利用を推進すること。
- (3) 泡瀬干潟のラムサール条約登録を推進し、その生物多様性の重要性について国際的な認定を得ること。

3月28日、BLIからの要請について、環境省記者クラブでBLIと本会が共同記者会見を実施。

写真はBLIアジア部門のリチャード・グリメット氏（左）と本会自然保護室の加藤和明（右）



これまでも本誌2002年9・10月号、11月号や2003年1月号でお伝えしてきたように、泡瀬干潟は、環境省が作成した「日本の重要湿地500」に掲載されるなど、その重要性は国や県も広く認めているところです。また、BLIと共に本会が作成に取り組んでいる、アジアのIBAにもリストアップされており、ムナグロの国内最大の越冬地としてラムサール条約登録湿地の基準を満たしています。

泡瀬干潟の認知度を高めることを目的に、3月29日、本会、(財)日本自然保護協会、WWF ジャパンの共催で、「泡瀬干潟シンポジウム | 埋め立ての問題点と保全に向けて」を開催し、150名を超える参加者が事業の様々な問題点について認識を新たにしました。

昨年10月に着工された事業は、海草移植試験の結果待ちなどで現在一時中断されています。二転三転する移植試験の結果が本当に将来を担保できるのか、もし事業が強行されるのであれば、失敗した場合の責任者名を今後明確にしていきたいと思います。

沖縄に残された最大の自然干潟である泡瀬干潟は、日本だけでなく国際的にも貴重な未来への資産です。本会はBLIと共に、泡瀬干潟のラムサール条約登録湿地の推進による地

域振興策への事業の転換を強く要求いたします。隣接する新港地区の埋め立て地への企業誘致もままならないなか、先祖伝来の貴重な地域資源である泡瀬干潟を潰して埋め立て地とすることが本当に地域振興につながるのかどうか、事業者はもちろん、地元沖縄市民一人ひとりが問われています。



3月29日、港区で行われた泡瀬干潟シンポジウムには、150名以上が参加

(自然保護室)

(注) IBA (Important Bird Area) 鳥類を指標として重要な自然環境を抽出し、保全するための BLI のプログラム。ヨーロッパでは IBA の過半数が EU の特別保護区に指定され、アフリカではラムサール湿地選定への利用が決まるなど、国際的に評価されている。



泡瀬干潟シンポジウム ～埋立ての問題点と保全に向けて～

国内最大のムナグロの越冬地であるばかりでなく、
絶滅危惧種として注目されているクビレミドロ・トカゲハゼの生息地であり、
レッドデータブック記載種を含む沖縄島最大の海草藻場を育んでいる泡瀬干潟。
この干潟が、国の公共事業により、今、埋め立てられようとしています。
泡瀬干潟の豊かな自然を未来に引き継ぐために、埋立て事業の問題点を明らかにし、
今なすべきことを議論していきます。

【泡瀬干潟とは?】

沖縄島中部中城湾に広がる約265haの干潟、藻場を含む浅海域で、貝類(270種)・甲殻類などの底生生物、魚類、シギ・チドリ等の渡り鳥など多様な生物が生息しており、環境省「日本の重要湿地500」に指定されているほか、シギ・チドリ類の越冬地としてラムサール条約の登録基準を満たしています。

また、沖縄島では辺野古沖に次ぐ最大規模の藻場(353ha)が残されており、リュウキュウアマモなどレッドデータブック記載の8種の海草を含む海草藻場をはじめ、絶滅危惧種として注目されているクビレミドロ(藻類)やトカゲハゼが生育・生息する貴重な自然環境です。

釣りや潮干狩り、自然観察など人々に日常的に親しまれてきた場所でもあります。

【課題を残したままの着工】

沖縄県知事の意見などにより、事業者は「環境監視・検討委員会」を設置、対策の検討と海草移植実験などを行ってきました。

しかし、海草の機械化移植実験が明らかに失敗し、代替案の検討も不十分、またクビレミドロやトカゲハゼ、シギ・チドリ類などを含む干潟生態系の保全についても、見通しは立っていません。

「環境監視・検討委員会」は、科学的見地から干潟生態系の保全策を検討する本来の機能を果たしておらず、一部の委員からは是正を求める意見が出されるなど、そのあり方が問われています。

こうした問題に対して各方面から寄せられた多くの疑問や意見に応えないまま、2002年12月、事業者は本格的な工事に着工しました。

泡瀬干潟と
ほくたちを守って!

泡瀬干潟



【国と沖縄県の埋め立て事業とは?】



国(内閣府沖縄総合事務局)と沖縄県の進める埋め立て事業は、マリーナや人工ビーチ、ホテルなどを建設するために干潟と浅海域を約186ha埋め立てるものです。

●主催／(財)日本自然保護協会、(財)世界自然保護基金ジャパン、(財)日本野鳥の会 ●後援／日本湿地ネットワーク(JAWAN)
●共催／泡瀬干潟を守る連絡会、泡瀬の干潟で遊ぶ会、沖縄野鳥の会、琉球湿地研究グループ、沖縄環境ネットワーク

開催日時

2003年
3月29日(土)
13:00-18:00

開催場所

富士ゼロックス(株)本社講堂

東京都港区赤坂2-17-22
赤坂ツインタワービル
東館3階



●交通 営団地下鉄
銀座線・南北線「溜池山王駅」下車徒歩5分
千代田線「赤坂駅」下車徒歩7分
千代田線/丸の内線「国会議事堂前」下車徒歩7分

プログラム

12:30
受付開始

13:00~13:10
開会・主催者あいさつ

13:10~13:25
報告1 未来に残したい泡瀬干潟の自然
泡瀬干潟を守る連絡会
小橋川 共男

13:25~13:40
報告2 鳥からみた泡瀬干潟の自然
沖縄野鳥の会
山城 正邦

13:40~13:55
報告3 泡瀬で今、何が起きているのか
泡瀬の干潟で遊ぶ会
長田 英己

定員
150名

基調講演

14:00~15:30

「海草移植と専門家委員会の問題点」

愛媛大学沿岸環境科学研究センター助手
金本 自由生

「環境アセスメントにおける市民参加と合意形成」

名古屋大学名誉教授
島津 康男

「海草藻場生態系の保全と地域社会」

青山学院女子短期大学講師
相生 啓子

15:30~15:40 休憩

パネルディスカッション

コーディネーター/花輪 伸一(WWFジャパン)

15:40~17:40 「泡瀬干潟を未来に引き継ぐために、今、何が必要か」

パネリスト…島津康男、金本自由生、相生啓子、清野聡子(東京大学大学院総合文化研究科)、
長田英己、開発法子(日本自然保護協会)、他

※予定は、一部変更することがあります。

17:45~閉会・連絡案内

参加お申込み方法

お名前・連絡先をご記入の上、1~4のいずれかにお申込みください。
電話・FAX・ハガキまたはE-mailのどの方法でもお申込みいただけます。
なお、当日参加の方は、直接会場へお越しください。

	名 称	担当者	住 所	電 話	FAX
1	日本自然保護協会・保護研究部	開発 廣瀬	102-0075 千代田区三番町5-24 山路三番町ビル3F	(03) 3265-0524	(03) 3265-0527
2	WWFジャパン・自然保護室	花輪	105-0014 港区芝3-1-14 日本生命赤羽橋ビル6F	(03) 3769-1713	(03) 3769-1717
3	日本野鳥の会・自然保護室	高井 加藤	191-0041 日野市南平2-35-2 鳥と緑国際センター	(042) 593-6871	(042) 593-6873
4	期限限定E-mail/2003年3月28まで有効 kenkyu@nacsj.or.jp				

泡瀬干潟が危ない！ 6 団体合同で質疑応答・要望を行いました。

検討委員会の最終結論が出ないまま着工される (No.660 2003 年 1 月号 P.32)

泡瀬干潟埋め立て事業（正式名称：中城湾港「泡瀬地区」公有水面埋立事業、埋め立て面積は国 175ha、沖縄県 10ha）が、環境監視検討委員会の着工許可の結論が出ないまま、2002 年 10 月 10 日着工されました。本誌 9・10 月号、11 月号でもご報告したとおり、泡瀬干潟は環境省の「日本の重要湿地 500」にも紹介されている沖縄最大の自然干潟で、ラムサール登録湿地の基準を満たす干潟です。それにもかかわらず、諫早に続き、またしても国の事業で、貴重な湿地が消えていこうとしています。

突然の着工を受け、11 月 6 日に環境 NGO 6 団体合同で、内閣府、国土交通省、環境省の課長クラスの方々と直接、衆議院第一議員会館にて質疑応答と要望を行いました。

その結果、次の問題点が明らかになりました。

（１）海草の移植（代替処置）の可能性について

環境監視検討委員会では「現段階では手植え工法は機械化工法より優れている」という結論しか得られておらず、代替処置として了承された訳ではないこと。

（２）すでに埋め立て事業が済んでいる地区（FTZ 地区）の企業誘致の現状について

11 月 6 日現在、FTZ 地区（新港地区、旧川田干潟）では 91 社の誘致予定が 9 社しか誘致されていないこと。「地域振興」の名目で過大需要予測に基づく公共事業がいまだに行われている。この論理のもと、沖縄の干潟はほとんど壊滅状態。

（３）環境大臣の３つの意見が無視されていること

10 月 18 日に出された環境大臣の意見の骨子は、

1. 海草の移植計画は科学的根拠に基づきあらかじめ公表されるべき
2. 機械化移植工法の評価は十分な期間のモニタリングに基づき慎重に判断する必要がある
3. 希少種クビレミドロ（藻類）の移植技術が確立したかどうかの確認に万全を期す必要がある

（詳細は <http://www.env.go.jp/info/kaiken/h14/1018.html>）

であるが、この３つの意見が全く尊重されていないこと。

今後、国の事業主体である内閣府への工事中止要請、環境大臣への要請強化など、地元 の NGO と強調しながら活動する予定です。国の事業ですので、広く国民の皆さんのご支

援をお願いします。



衆議院第一議員会館での質疑応答と要望

(右側：内閣府・国土交通省・環境省の実務担当者、左側：NGO 6 団体代表者)

(自然保護室)

守ろう！沖縄最大の自然干潟

シギ・チドリ の貴重な生息地・泡瀬干潟埋め立て問題！

(No.658 2002 年 11 月号 P.36)

前月号の活動でも取り上げた泡瀬（あわせ）干潟埋め立て問題。環境省の「日本の重要湿地 500」に選定され、ムナグロの越冬個体数で日本最大を記録している干潟はいま、埋め立ての一步手前に立たされています。現在唯一の歯止めとなっている「中城港湾泡瀬地区環境監視・検討委員会（表 1）」（以下、環境監視検討委員会と略）では海草（アマモ類など）のみが焦点となり、委員会で移植可能との結論が強行されればすぐにも着工が行われる構えですが、シギ・チドリ類の生息地としての機能等については十分に検討されておらず、再検討すべき課題が山積しています。

●危機にある沖縄の干潟

沖縄の主な干潟の現状



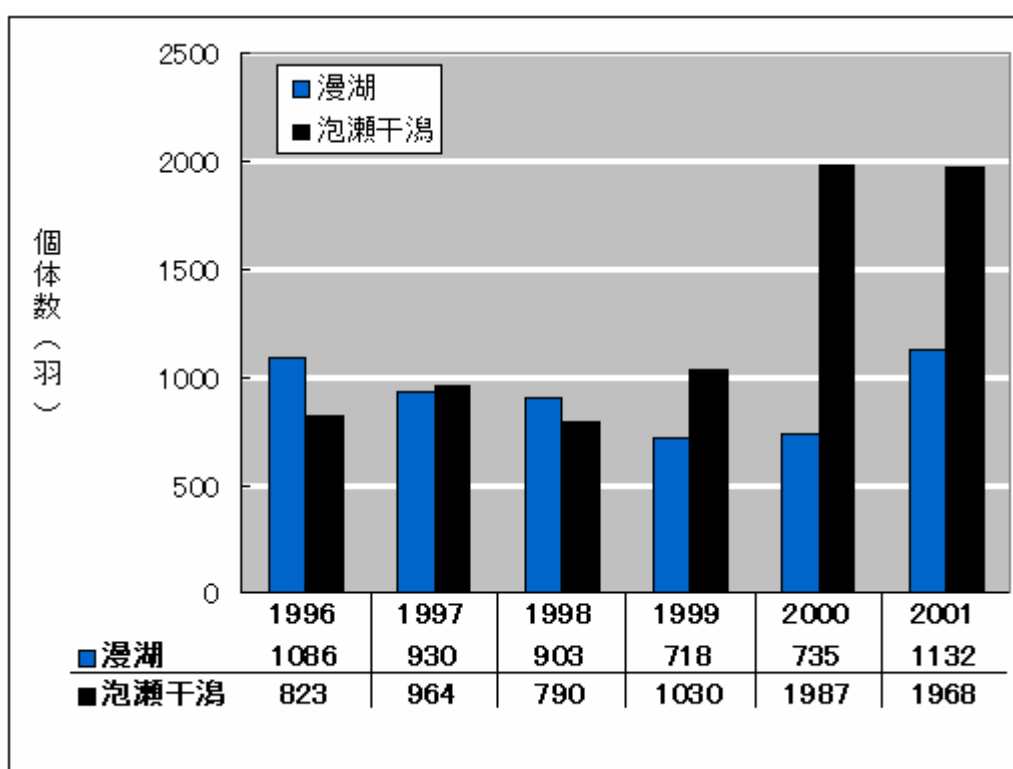
基地の建設が計画されている辺野古（へのこ）は珊瑚礁とジュゴンの生息地として広く知られていますが、沖縄には他に、県内唯一のラムサール条約登録湿地である漫湖（まんこ）をはじめとして、シギ・チドリ類の重要な越冬地、渡りの中継地となっている干潟も数多く存在します。これらの多くが埋め立てられ、また流れ込んだ赤土による影響で壊滅的な打撃を受けるなど、沖縄の干潟は現在危機的な状況にあります（図 1）。

（図 1）沖縄の渚の現状

（泡瀬干潟で遊ぶ会提供。）

●沖縄県最高のシギ・チドリ類渡来数

面積187haの泡瀬干潟は、沖縄島に残る自然干潟の中でも特に貴重なものです。環境省の重要湿地に指定されている以外にも、埋め立て計画地の大部分が沖縄県の自然環境保全指針で評価ランクⅠ（自然環境の厳正な保護を図る区域）に、その他も評価ランクⅡ（自然環境の保護・保全を図る区域）に位置づけられています。沖縄県版レッドデータブックで絶滅危惧種に指定されているトカゲハゼ、藻類のクビレミドロが確認されているほか、海草・海藻類の繁茂する藻場は、沖縄でも最大のものです。シギ・チドリ類の渡来数はラムサール条約登録湿地の漫湖と比べても多く（図2）、沖縄県内では最高、全国でも十指に入ります。



（図2）漫湖と泡瀬干潟における水鳥の年度別最大個体数。1980年代の漫湖では3千羽を越えることもあった。（資料提供／沖縄野鳥の会）

●シギ・チドリ類に対する影響の過小評価

事業者側は、シギ・チドリ類をはじめとする水鳥類への埋め立ての影響については、「ほとんどない」としています。その根拠は、「出島方式（海岸線から話して埋め立てを行う方式）を採用するため、干潟の8割程度は残る」「現在干潟に生息するシギ・チドリ類の餌は、越冬期間全体の採餌量よりはるかに大きいため、埋め立て後に干潟面積が2割程度減少しても、十分な餌量がある」と主張しています。

しかし埋め立てによる干潟の変化と底生生物相の変化、それによる鳥類の採食への影響な

どは、ほとんど議論の対象となっていない。環境監視検討委員会の資料によれば、埋め立て地区内にシギ・チドリ類の主要な採食地域が含まれているほか（図3）、委員会にはシギ・チドリ類の専門家が入っていないなど、影響が十分に検討されていません。

すでに出島方式を採用して埋め立てが行われた新港地区の残存干潟や人工造成した干潟では、底質の砂質化が起こり、トカゲハゼの生息がほとんどみられなくなったため、現在、土砂の入れ替えを行うなどしています。沖縄野鳥の会（吉里伸会長）の調査によれば、埋め立て前と比べてシギ・チドリ類が約9割も減少しています（参照／前号45頁）。

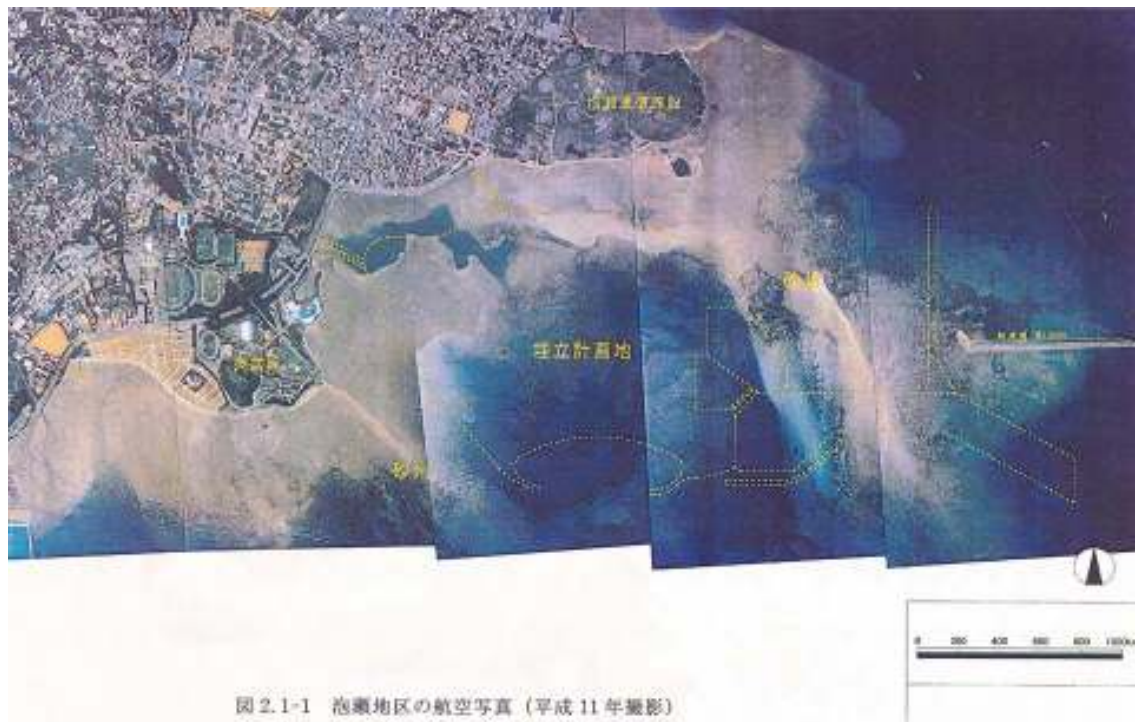
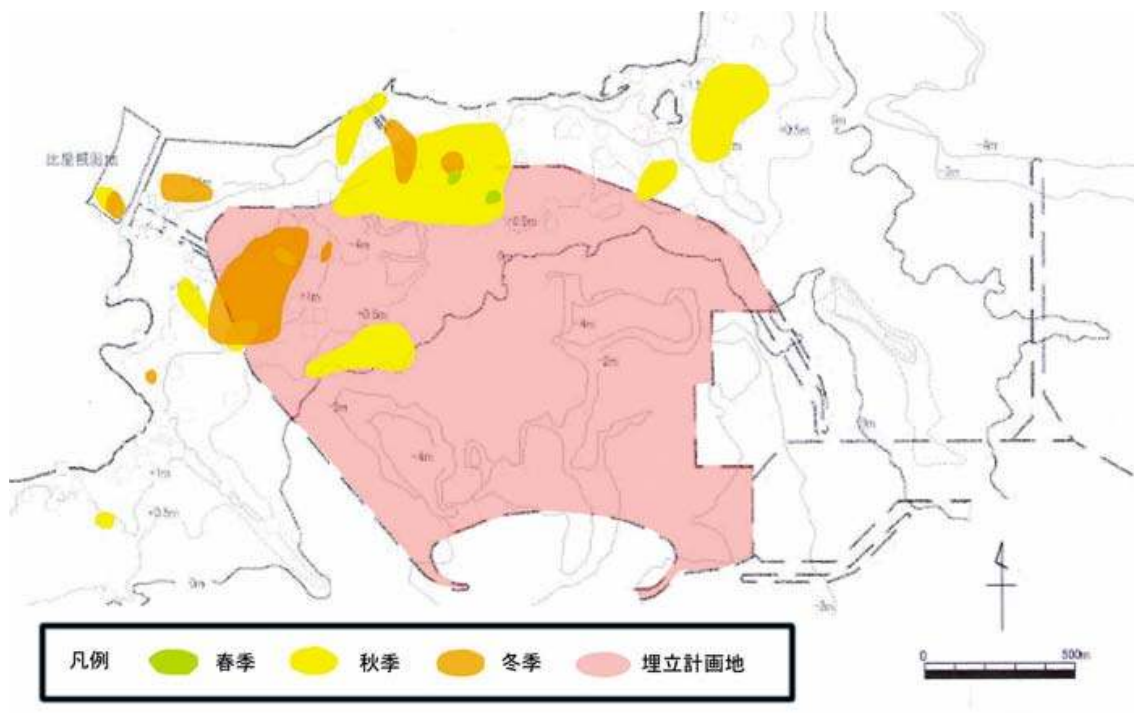


図2.1-1 泡瀬地区の航空写真（平成11年撮影）

埋め立て計画地の航空写真



泡瀬地区周辺におけるシギ・チドリのとまとった分布地点（干潮時）。調査時期は8月、11月、2月
（環境監視検討委員会資料より。）

●再検討が必要

環境影響評価準備書に対する県知事意見では、「価値の高い自然のある場合は、自然本来の姿を保全することをまず優先しなければならない」とされています。環境監視検討委員会において、委員の一人から「影響緩和策として提示されている環境創造の技術的担保が可能か、生態系の保全という立場から意味があることかどうか技術的に検証することが役割と考えている」との発言がありました。出島方式や現在採用されている環境保全措置等の効果については、客観的な科学的事実に基づいた再検討がぜひとも必要です。

本会では今年8月2日、小杉隆会長らが WWF ジャパンと連名で要請書を大木浩環境大臣に直接手渡し、この問題について環境大臣としての助言をするよう要請しています。今後、事業者側への再検討要請や、シギ・チドリ類に関わるアセスメントのやりなおし、貴重な自然を活かした地域振興策への転換等も視野に入れ、泡瀬干潟保全のための活動を行っていきたいと考えています。



大木環境大臣に要請書を提出。

右から金井裕本会自然保護室長、小杉隆会長、大木環境大臣。



7月の泡瀬干潟

(加藤和明／自然保護室)

緊急アピール！

出島方式では"自然干潟"を残せない

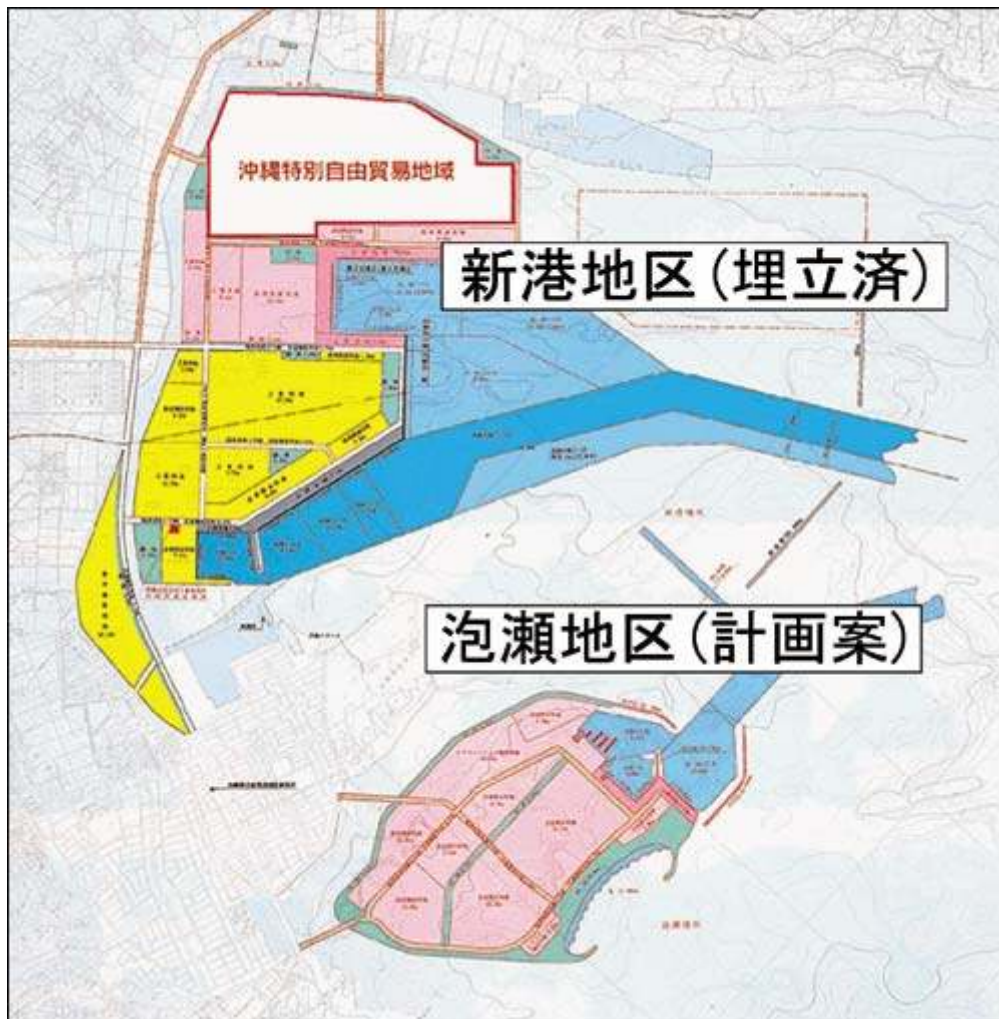
沖縄最大の干潟・泡瀬干潟埋め立て問題

(No.657 2002 年 9/10 月号 P.45)

沖縄県で貴重な自然干潟の埋め立て事業に着手されようとしています。埋め立ての対象となっているのは、沖縄県中城湾・泡瀬干潟。ここは、環境省の「日本の重要湿地500」にも選定されており (<http://www.sizenken.biodic.go.jp/wetland/459/459.html>)、ムナグロの越冬個体数は日本最大で、ラムサール条約登録湿地の基準を満たしています。

泡瀬干潟の埋め立て事業は、1987年に構想が策定された東部海浜開発計画の一部として、1998年に沖縄総合事務局が埋め立て事業を引き受けたもので、すでに環境影響評価の手続きは終了、公有水面埋め立ての許可がおりています。

現在、環境影響評価に対する知事意見や沖縄市長の要請をもとに環境監視検討委員会が組織され、その下に3つのワーキンググループ（通称；海草 WG、陸域 WG、海域 WG）が設置されています。本格的な着工を見直すために残された機会は、この環境監視検討委員会とワーキンググループの各委員の方々の科学的かつ良識ある判断にゆだねられているのです。



泡瀬干潟周辺の港湾計画図。北側（図上部）が既に埋め立ての進んでいる新港地区、南側が泡瀬地区



7月の泡瀬干潟。春秋の渡りの季節や越冬期にはシギ・チドリ類で賑わい、2000羽を越すこともある。

地元住民の潮干狩りや水遊び場として、また環境教育のフィールドとしても活用されている。

干潟沖の浅海域には、沖縄本島では最大規模の藻場が広がる

事業者である沖縄総合事務局の埋め立て事業の整備目的は、

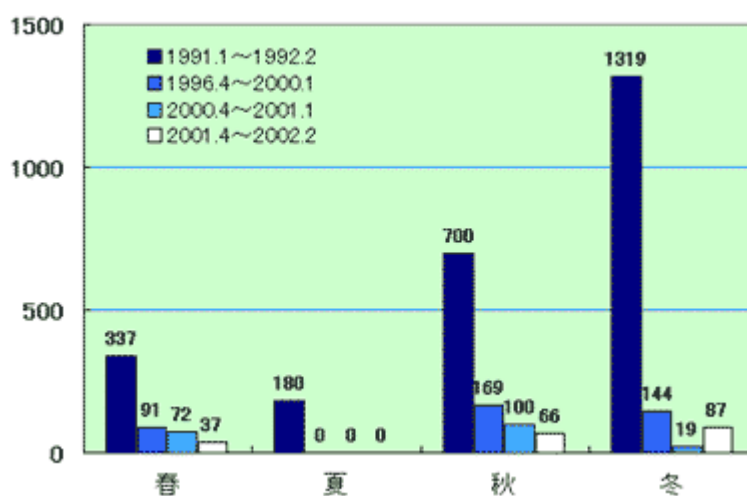
1) 「マリンシティ泡瀬」の整備促進

国際交流リゾート拠点や海洋性レクリエーション活動拠点等の整備

2) 新港地区の特別 FTZ 地域の整備促進

航路整備のための浚渫土砂の有効活用

とされています。<http://www.dc.ogb.go.jp/nakagusukuwankou/seibi.html>。新港地区とは、泡瀬干潟の北側で埋め立て事業がすでに進んでいる地区で、ここもかつては「川田干潟」とよばれる泡瀬干潟に匹敵する自然干潟でしたが、現在は 210ha の埋め立て工事がほぼ完了しています。この新港地区では、泡瀬干潟の埋め立て事業で干潟の保全策として採用されている「出島方式（海岸線から離して埋め立てを行う）」によって埋め立てが実施されました。現在設置されている「陸域・海域 WG」では、泡瀬地区埋め立てによる影響の検討資料として新港地区埋立後の調査結果が提出されています。これには「鳥相には変化がなかった」とだけ記されていますが、地元の野鳥保護団体である沖縄野鳥の会（会長 吉里伸）の調査によると、新港地区でのシギ・チドリ類の飛来個体数は、埋め立て前と比べて約 9 割も減っていることが指摘されています（グラフ）。また、福岡県和白干潟などでも、明らかな環境悪化や水鳥の減少がみられるなどの影響が出ており、潮流の促進策などが提案されています。



新港地区埋め立て前後のシギ・チドリ類個体数の比較（調査データ：沖縄野鳥の会）

本会は、地域の振興について否定するものではありません。しかし、振興計画は広く市民との合意に基づいて行うべきであり、利用見通しも不十分なまま浚渫土砂を安易に埋め立て事業に回すべきではありません。泡瀬干潟は沖縄にしか存在せず、埋め立て地は全国いたるところに存在することは厳然たる事実です。この機会に、地域の特性を活かした持続可能な振興計画について、先祖から脈々と受け継がれた郷土の貴重で美しい泡瀬干潟を守り、最大限活かしたものにすべきという世界の新しい潮流について深く考えていただき

たいと思います。

なお、この問題に関し、8月2日、WWF ジャパンと連名の要請書を、小杉隆本会会長らが
大木環境大臣に直接手渡しし、環境大臣としての助言をするよう要請しました。

(自然保護室／生息地保全グループ)

●＜活動＞

ヘリコプター着陸帯移設事業 アセスへ意見書を提出

沖縄・やんばる自然保護問題

(No.657 2002 年 9/10 月号 P.46)

ヘリコプター着陸帯（ヘリパッド）移設事業とは、やんばる東部に広がる米軍北部訓練場（7513ha）の一部返還（3987ha）に伴い、返還地域内にあるヘリパッド7ヶ所を残る部分に移転する事業です。事業主の発表によると、同事業は法令的には環境影響評価の対象外なのですが、やんばる地域の自然環境の希少性を考え、環境影響評価に準ずる手続きを踏んで事業を進めていくとのことです。検討書は、環境影響評価の手続きでは「方法書」と呼ばれるものに当たります。

今回公開された「北部訓練場ヘリコプター着陸帯移設に係る継続環境調査検討書」について、以下のような内容の意見書を提出しました。

1. アクセス道路による影響把握の必要性

訓練場ヘリコプター着陸帯自体は、直径75mの円形でアルファルトの広場がある施設であるが、そこにアクセスする道路に関しての環境影響評価がないのは不備である。

2. 自然度総合評価の信頼性について

移設候補地決定のためにメッシュ区分による自然度総合評価が行われているが、評価基準となるデータの精度及び信頼性が明らかでない。また検討書の総合評価については、希少種偏重のため総合的な環境評価が不十分であること、種数を基盤とした質的評価のみで量的な評価がないなどの問題があり、評価基準の区分を中心に見直しが必要である。

3. データの公表及び信頼性の確保、影響評価に係る透明性の確保について

データの信頼性や評価過程の透明性を確保するため、データやデータ収集の責任者の公表、影響評価の検討を行う委員会等の設置と透明性の確保が必要である。

4. 環境大臣の指導、助言

今後行われる影響評価等各手続きにおいて、本邦の生物多様性保全及び野生生物保護に責任を負う環境大臣の指導、助言を受けることが必要である。

訓練場は立入禁止区域のためなかなか状況を把握しにくい地域ですが、国際的にも重要な固有種をはじめとする希少な生物の生息地を保全していくために、引き続き事業の進行状況を注視するとともに、具体的な改善策を提言していく考えです。

また、これと関連して米軍から返還予定の土地に関しても、現在は非常に良好な状態を保っているため、返還後の保全計画についても十分な調査と提言をしていきたいと考えています。 （自然保護室）

● <活動>

ヤンバル保護で要望書 (No.622 1999年7月号 p.38)

ノグチゲラ、ヤンバルクイナの生息する沖縄県のヤンバルの亜熱帯林の保護について、岩垂寿喜男・保護と調査に関する委員会委員長は四月十五日、稲嶺恵一沖縄県知事を訪問し、要望書を提出しました。これは日米特別行動委員会で返還が合意された沖縄本島の北部訓練場のヘリコプター離着陸帯（ヘリパッド）七が所を移設する先として、国頭・東村の亜熱帯林が挙げられていることに関して、見直しを求めたもの。琉球列島動植物分布調査チームの岩橋統琉球大教授らも同行して、二十二種の固有種、一二六種もの希少種を抱える生物多様性の宝庫であるヤンバル保全の意義を訴えました。

やんばる支部（平良景昭支部長）は島に残された唯一の亜熱帯照葉樹林としての重要性和、エコツーリズムによる賢明な利用の必要性を措摘、これに先立つ三月二四日に防衛施設庁、林野庁他に要望を送付しています。

岩垂委員長は二〇日には大森敬治防衛施設庁長官を訪問。「ヤンバルの重要性は理解している。調査結果をみて慎重に対処したい」との回答を得ました。本会からは更に林野庁、沖縄開発庁、環境庁、防衛庁、外務省、アメリカ合衆国に対し要望を送り、善処を求めました。（保護・調査センター）



稲嶺知事に要望書を手渡す岩垂委員長。右端は宮城邦治やんばる支部事務局長

（写真提供琉球新報社）